

C-2. 「よく走る車を作る！」

北陵幼稚園(島根県簸川郡)

[4歳児]

自分たちの遊びとして、乗り物製作を展開していった事例

月 日	子どもの活動と教師のかかわりと指導性	考 察 (教師の指導)
4 / 20	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 色々な箱を出してきて、乗り物を作り始める。箱やストロー、ペットボトルを探して作り、壊しては作るを繰り返す。 ◆ 車は厚紙やダンボールを切って車輪を作る。ストローや竹ヒゴを使って車軸にしている。 ◆ 一生懸命車作りに励むが、思うようにいかないこともたくさん出てくる。何回もやり直す。一方、K児はビニールテープで廊下に線を引き、車の走る道だと言う。「その線は何の線ですか」と聞く。K児「車の道」T児「電車の線路」「おもしろくなってきたね」と話す。それまで一人ひとりの活動であったが、線を媒介として友だちが集まり、車を走らせて楽しむ姿が見られるようになる。T児・K児・M児・I児・N子・S児はビニールテープの線を「線路」と呼んでいる。教師は道路と思い「いい道路ができたね。車がよく走るね」「違うよ線路だよ」と言われてしまう。一本の線が、道路になったり、線路になったりしているのである。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 今までの実践から、4歳児の遊びのことを考えると、車などはスピードが出るものとして捉えているように思う。実際に子どもの心の動きは意味が深い。 ◆ 4歳児の子どもたちも、友だちの模倣は欠かせないとと思う。しかし、完全に模倣をするのではなく、その中に自分の考えをきちんと表現している。また、線を引くという行動も子どもがどうしたら面白くなるのかを考え出した知恵だと思う。 ◆ ビニールの線が道路にもなり、線路にもなる。子どもたちのそれぞれの思いを受け止めていくことが教師の役割である。みんなで一緒にという思いがビニールテープに込められている。 
(大きな電車の事故がニュースになり、園でも話題になる。4歳児みんなで出雲市駅に遠足に行く)		
6 / 1	<ul style="list-style-type: none"> ◆ S児の車の形がシンプルになっていった。色々な飾りがなくなっている。R児もM児もT児もくっつけていたものがなくなり、車の中に粘土を入れているのである。 <p>ビニールの線がなくなり、積み木を運んできて場所を立体的に作り始めた。粘土を入れ始めたのはK児である。車体のどの場所に置くかを試している。</p>  <p>前  真ん中  後ろ </p> <p>スピードを出すためには、手で押していくは限界があることに気づいてきた。一人遊びから友だちと一緒に場で共有しながら遊びが進むようになってきた。箱の大きさと粘土の量と置き場所の関連を繰り返し試している。</p> <p>大きな箱の前に粘土を置くとひっくり返ってしまう。 小さい箱の車に粘土を前の方に置くとスピードが出る。 中くらいの箱は真ん中がいいなどを試して遊ぶ。おもしろくてしかたがない様子が見える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 飾りをたくさんつけて、立派な見栄えのいい車からスピードを出すための工夫を始めるようになった。子どもたちはスピードの出る車を望んでいたに違いないのである。教師はいかにも車という、見た目を気にしていたように思う。子どもの考えと教師の思いのズレがここではっきりと見えてきて反省する。遠足で体験したことは、改めて心のゆさぶりになったように思う。 ◆ この活動から子どもたちの遊びに変化が見えてくるようになった。 * 自分の考えを出せばいい * 考えることは楽しいこと * 不思議に思ったことは調べると分かってくる。
6 / 2	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 積み木コースの環境も急な傾斜にしたり、ゆったりした傾斜に作りかえるのである。特に、T児・R児・S児・I児は「ここは急すぎる」「車の腹が擦る!」と言いつつ繰り返し自分で納得のいくまで遊ぶ。 ◆ T児が「先生 あんまりスピードが長くない もっと長くなる車を作りたい」と話してくる。R児「モーターで走る車を作りたい」2人の子どもの話をクラス全体に紹介し話し合う。「作りたい!」と子どもは話すが、果たして全員の子どもたちがモーターの車を作りたいのか教師は一瞬戸惑った。教師がお店で最も簡単な車を購入し子どもと作って走らせてみることにした。 ◆ 子どもの思いがどの程度深いのかを調べるために、しばらく、モーターの車には触れないようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 教師は子どもが必要とすると思われる環境を探し、それを出していくタイミング、探して見つかる場所に置くタイミングは大きな指導であると考える。 ◆ 電車に乗り、駅員さんとかかわった遠足の経験がスピードの出る電車につなげるようになったと思う。しかし、子どもの言うモーターで走る車を作ることが果たしていいのか考える。 ◆ 教師は、きっと既成のものはすぐに飽きるから出来るだけ出さない方向を考えたいと思っていた。しかし、子どもの気持ちを勝手に解釈してしまうことは教師の自己満足であったり、押し付けではないかと考え、既製品を出す。

6 / 14	<p>◆ T児「先生 今日は買ってきてくれた?」「まだ…」 R児「買うっていったでしょ。嘘つくといけんよ」 それでも、「うん…」と言ってその場を取り繕う。</p> <p>◆ 自分たちの車を走らせて「つまらんが…」「もっと速く走るとおもしろいのに…」「先生は嘘つきだが…」 これ以上子どもの気持ちを無視することは出来ないと想い買う。 M児は「僕は汽車がいい」K児も「僕も汽車がいい」と言う。汽車派とモーターカー派に分かれる。</p> <p>◆ いよいよモーターカーと汽車を作ることにする。子どもは大喜びで取り掛かる。出来た子どもから電池を入れて走らせる。長い廊下をすいすい走る。子どもたちは大喜びで追っかけていく。 T児「僕が一番速い!」S児「みんな一緒だよ。だって同じ車だもん」 T児「でも 僕が速かったもん!」 汽車はモーターではなく、電池を入れると豆電球が点くのである。汽車は手動で動かすのである。</p> <p>◆ しばらくは、そのモーターカーで遊ぶが、この頃からまた、以前自分が作った車を出して遊び始めるのである。 スピード感が欲しい時は既成の車、自分でいろいろ工夫したい時は、自分で作った車を使うのである。そのために、道路の工夫も合わせて始まる。線路・道路・高速道路・トンネル・川などを毎日継ぎ足し、走らせ、継ぎ足しを繰り返す。</p> <p>◆ 高速道路を作っているR児はガードレールがないと車が落ちてしまうので、硬い紙を小さく切りガードレールをついている。トンネルを作っているT児はトンネルの中が暗いから電灯をつけるといつて豆電球が点くようにする。汽車の既製品を持っているM児・K児・T児・F児・F子は、出雲市から松江までの駅名を調べ、線路と駅舎を作り始めた。 I児はモーターカーのスピードを生かす直線コースを作り自分で走らせ満足するのである。 R子・H子・N子・N児たちは駅のキヨスクを作り弁当やお茶、本(絵本は自分たちが作った絵本)を置き始めた。</p>	<p>◆ 同じものを全員同じではなく、子どもに選択肢を与えることにした。</p> <p>◆ 簡単には作ることのできない既製品であったが、子どもたちは自分たちが言い出したことに責任を持っているのか愚痴を言わずにがんばっている姿を見ることが出来た。</p> <p>◆ 教師は「やはり…既製品は」という当初の思いを再び持つことになり、焦りを感じた。「もったいない。どうしよう」という気持ちである。また「どうして作らせただろう」という罪悪感にも似た思いを持ったことは、事実である。教師の指導性は難しいことを嫌というほど感じた。</p> <p>◆ 既成の物、手作りのものだけに捉われて子どもの本質を信頼しないでいたことを深く反省し、子どもとともに楽しもうという思いに変わった時、子どもの行っている活動の素晴らしさを知ることになった。ガードレールの工夫、駅名調べ、トンネル工事など子どもの身近なところに起きている様々な事象を子どもたちはきちんと受け止め、一人で、または友だちと一緒に「なぜ」「どうして」「もっと工夫をしよう」という思いで精一杯遊びを創りあげていることを実感できた。</p> 
7 / 1		

まとめ

- 4歳児の生活は、模倣から発展し、自分自身のものに創り上げていくことが分かった。模倣は想像(創造)性をかきたてる最も大切な基盤であり模倣遊びなくして、考える力を育てることは出来ないと考える。想像(創造)的な考えを持つ子どもたちは、日々、どのような生活経験を蓄えていかなければよいかを考えるところである。
- 乗り物に興味関心を示し始めると、子どもたちは「水を得た魚」の例えのように、どんどん遊びを考え、工夫していくことが出来た。特に、本物体験は子どもの心を大きくゆさぶるものとなることは言うまでもないが、「何時」「どのように」「どこへ」「どのようなねらいで」を教師はしっかりと持っていないと子どもの心と共感しあうことはできないと思う。子どもたちの心に添った支援を常に念頭においてこそ、教師の指導性が明確になってくるものと考える。
- 保育は「教師と子どもの共同作業」であることをつくづく感じることができ、子どもの「なぜ」「どうして」にもっと学んでいきたいと強く感じた。

ポイント

身近な素材で乗り物を作り、テープで床に線を引き道や線路に見立てて遊ぶという始まりは、当初の子どもの思いの表れた作品や遊び場になっていました。しかし、「動く」ことへの興味が深まることで、シンプルな形の乗り物になったことから、場作りも「動き」に注目して試し、イメージした動きを楽しもうと考え工夫して作るようになれば、遊びが転換していることが分かります。動く乗り物という発想から出た「モーターで走る車(既製)」での遊びも、試行錯誤の中で実現されたことで、遊びの場作りの工夫を引き出しました。また、既製の車にこだわることなく、動きや作り方を工夫し製作することも楽しみ、双方の面白さを生かした遊びの場作りに結びつきました。車の動きや遊び方を考え、遊びを創造し工夫する喜びを味わう経験を重ねた子どもたちの中に、「科学する心」が育っていることが分かります。